

# スポーツ学再考：BSSCにおける競技スポーツの現状と課題

渋谷俊浩<sup>1)</sup>

## The present conditions and problems of athletic sports in BSSC

Toshihiro SHIBUTANI

Key words：競技スポーツ，チャンピオンスポーツ，勝つこと，SPDLIサイクル

### 1. はじめに

開学8年目の節目に当たり，これまでの我々の取り組みを振り返りながら，本学の教育研究の根幹である「スポーツ」「スポーツ学」について，これらの発展を推し進める両輪の一方である競技スポーツの視点から，改めて検討を加えたい。

#### 1-1. これまでの経緯：第1期

本学の競技スポーツの経緯を，開学から4年間の第1期（2003～2006）と，定員増・コース増設後の第2期（2007～2010）に分けて振り返る。

2003年，日本初のスポーツ大学として開学すると同時に，陸上競技部（女子長距離主体）・男子サッカー部をはじめとする13種目15クラブが創部した。学生のクラブ加入率は90%以上であったが，部員は1年生のみで，専門の指導者や施設が不十分なクラブも多く，全てが手探り状態のスタートとなった。

そのような中，2005年の男子サッカー部・硬式野球部の1部リーグ昇格や，学生・教員のアジア大会をはじめとする各種国際大会への出場，Jリーガーの輩出など，本学の競技スポーツは着実に発展し，2006年には18種目20クラブが活動を始めた。

#### 1-2. 第2期

2007年，定員増（180名⇒270名）・コース

増設（競技スポーツ学科 スポーツ情報戦略コース），カリキュラム改編を実施した。

その結果，2008年には学生・教員の北京オリンピック出場（シンクロナイズドスイミング，女子サッカー）を筆頭に，各種国内主要大会での優勝および上位入賞が相次ぎ，学内でも21種目23クラブが活動するなど，本学の競技スポーツの最盛期を迎えた。

しかしながら，これ以降はユニバーシアード等の国際大会出場（男子サッカー，女子水球）や国内主要大会優勝（女子テニス），一部への昇格（2009年水泳部，2010年陸上競技部男子）などの活躍はあるものの，クラブ加入率の低下（70%程度）とそれに伴うクラブ数の減少（17種目19クラブ）など，大学全体としてはやや停滞状況にあることは否めない。

### 2. 現状を憂う

果たして，この停滞状況の原因は何か？

ひとつは，少子化など社会状況の変化という外的なものの影響であろう。加えて，18歳人口の減少傾向にもかかわらず，近畿圏内に体育・スポーツ系の学部・学科・コースを要する競合大学が乱立するなど，本学を取り巻く状況は非常に厳しくなっている。

その一方で，私が最も憂慮すべきだと考えるのは，本学の競技スポーツ自体の変質もしくは成熟不足という，内的なものの影響である。一例を挙げると，我々は混沌の第1期に

1) 競技スポーツ学科

は、まず「勝つこと」に最大の力を尽くした。ある意味さまざまなハンディを克服し、「既存のもの」「伝統」を打ち破ろうとした。その結果、ある程度のビギナーズラックがあったにしろ、いくつかの競技がそれぞれの目標を達成することができた。しかしながら、いよいよ充実期に入るべく第2期になり、大きなハードルにぶつかった。それは「勝ち続けること」である。ライバルに研究され、我々をはるかに上回る伝統と組織力（ひと・もの・金など）で対抗されることとなり、これまでの「目新しさ」「勢い」だけでは到底太刀打ちできない状況が生まれつつあるのだ。

今、我々には「戦略」が必要である。

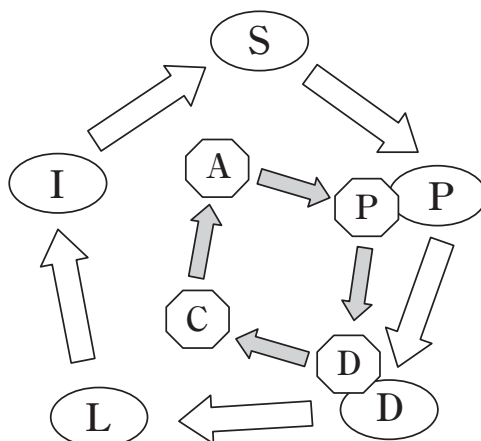
### 3. 今後の課題と展望

ここで、僭越ながら「本学陸上競技部の関西インカレ1部昇格へ向けた取り組み」を紹介する。

実は、陸上競技部における私のコーチとしての究極の目標は、日本一はもちろん、世界に通用するアスリートを輩出すること、すなわち頂点を極めることである。そして、この目標を達成するためにはどうすればよいかと考えた時、まず重要なのが「金の卵との出会い」である。優れた素材と出会うには「運・縁」にも恵まれる必要があるが、人力を尽くすことで、これらの可能性をさらに大きくすることができるのだ。つまり、関西インカレ1部昇格自体は究極の目標を達成するための前提条件の一つであり、陸上競技部全体の競技力を向上させ、回りに注目され、アピールすること（広報・宣伝の要素）で、数少ない金の卵達が本学に目を向ける可能性を作り出しているに他ならない。

これは、近年ビジネスの世界で実践されているSPDLIサイクル（Strategy：戦略－Plan：計画－Do：実行と情報収集－Learning：分析と学習－Innovation：変革）と既知のPDCAサイクルとのダブルループ構造をヒントにしたものである。

言うなれば、陸上競技部のみならず本学の競技スポーツが、さらには本学全体（スポーツ・スポーツ学）がさらに発展する＝勝ち続けるためには、これまでの枠に捉われることのない、構造的な変革までもを含んだ戦略を確立することが緊急の課題であろう。



図：SPDLIサイクルとPDCAサイクルとのダブルループ構造

### 4. まとめ

前回、学部長から提言のあったMIP（モラル、インテリジェンス、プラクティス・フィジカル）の3本柱と併せ、今こそ再チャレンジの時である。そして、まずは競技スポーツがその先陣を切るのだ。

私の拙稿がきっかけとなり、本学においてもこれまで以上に競技スポーツに対する議論が活発になれば幸いである。

### 参考文献

- 1) びわこ成蹊スポーツ大学 自己点検評価委員会編（2009）自己点検評価報告書（本編・資料編）：p.100
- 2) 日本陸上競技連盟（2009）競技者育成プログラム：p.78 pp.51-62
- 3) 佐藤正伸，他（2010）「コーチ学」の再考に向けて，スポーツ方法学研究，第23巻第2号：p.202, pp.91-110